第3章 家族史と歴史人口学の架橋

落合 恵美子(京都大学)

[要旨]

ユーラシアプロジェクト以後の歴史人口学的家族史研究は、徳川日本の「人口-家族システム」の地域的多様性に関する速水融の3地域説を、実証研究の成果をもって検証してきた。速水のあげた各地域の特徴の多くは検証されたが、一部は修正が必要であることが分かった。さらに各地域の研究が深まり、時系列的変化も含めた地域間比較が可能になるにつれ、明治維新に先立って、18世紀末ないしは19世紀前半から地域的多様性が縮小し、標準化へと向かう変化が始まっていたことも明らかになった。日本家族の標準化は通説のように民法制定によりなされたのではなく、近世後期に開始していたことを実証的に示した意義は大きい。近代国家が日本を統一したのではなく、むしろ社会レベルでの日本の統一が明治維新を可能にし、中央集権的近代国家成立の地ならしをしたという、歴史観の転換をもたらすものである。

キーワード 人口-家族システム, 3 地域説, 地域的多様性の縮小, 標準的家族モデル, 家

はじめに

「ユーラシア人口・家族史プロジェクト」は、その計画段階から歴史人口学と家族史研究が分かちがたく結びついて展開するように構想されていた。そのことは名称にも明示されているとおりである。プロジェクト内に家族史班が組織され、国際日本文化研究センター助教授として着任して間もない筆者が家族史班の班長を務めさせていただくこととなった。ユーラシアプロジェクト終了後の20年間の歴史人口学の発展を、家族史との関わりで振り返る本章を担当させていただくのも、それゆえと理解している。

本章では、ヨーロッパと日本における歴史人口学的家族史の発展についてごく簡単に概観した後、ユーラシアプロジェクト以後の主要な成果を「徳川日本の人口一家族システムの地域的多様性とその縮小」を軸に紹介したい。

1. 家族史と歴史人口学

1.1 ユーラシアプロジェクト以前:ヨーロッパと日本における展開

1970 年代に始まったヨーロッパの家族史研究の第二の隆盛期は、歴史人口学の発達に支えられていた。ルイ・アンリ(Louis Henry)が考案した「家族復元法(family reconstitution)」がそのまま家族史研究に直結したわけではない。「教区簿冊(parish register)」から復元されるのは夫婦関係と親子関係だけであり、その人々が生活単位としての家族(世帯)を形成していたかどうかはわからない。ケンブリッジグループのピーター・

ラスレット (Peter Laslett) がイギリスの「住民台帳 (listings)」を世帯研究の資料として見出したことから,数量的家族史研究の土台が築かれた。ケンブリッジグループの正式名称はCambridge Group for the History of Population and Social Structure という。ラスレットは家族などの家内集団 (domestic group)を micro social structure と呼ぶので,人口史と家族史を共に解明することがケンブリッジグループの当初からの目的であった。社会科学史学会 (Social Science History Association)などの国際学会でも歴史人口学と家族史は一緒の部会を作り,連携しながら発展してきた。

日本の歴史人口学は、資料の性質から見るとヨ ーロッパよりはるかに有利な条件をもつ。ヨーロ ッパでは教区簿冊から得られる人口動態情報と, 住民台帳等に記載されるセンサスタイプの世帯 の静態情報とが、日本の宗門・人別改帳では一つ の資料から得られる。「家族」や「世帯」を復元 する必要もない。歴史人口学と家族史とを統合す るための理想的資料と言うことができる。速水融 はラスレットが主催した会議に出席して Household and Family in Past Time (1972) に 論文を寄せており、17世紀末からの「小農化」 (単婚小家族化)の実証,「婚姻革命」の発見, 婚姻年齢の東西格差に関するいわゆる「フォッサ マグナ」仮説の提出等,家族史研究としても大き な貢献を次々に行った(落合 1999)。速水自身 の言葉によれば、(歴史人口学の隣接領域として) 「なんといっても最も近い研究領域は家族史で あり、ときとして両者は境界線がないほど近接し ている。筆者は自分が『家族史』の専門研究者だ

とけっして考えたことはないが, 発表した論文の

いくつかは、無意識的に『家族史』の領域に踏み込んでしまったものもある。」ということである (速水 2002)。

1.2 ユーラシアプロジェクトにおける家族史研究

「ユーラシア人口・家族史プロジェクト(The EurAsian Project on Population and Family History=EAP)」(1995-2000 年)は,速水の熱意により実現された 5 ヶ国のチームの国際共同研究である。参加国は,記名式かつ数十年から百年以上連続した人口資料が入手可能な地域という基準で選ばれた。前述のようにプロジェクト内に家族史班が組織され,筆者が班長を務めさせていただいた。

ユーラシアプロジェクトの資料とデータベースは、その性質から2つの大きな強みをもっている(落合2009)。まず記名式かつ長期間にわたるという資料の特性を活かして、個人を単位としたミクロ分析、かつ時間の視点を入れたライフコース分析やイベントヒストリー分析も行うことが可能である。「世帯構造(household structure」」は個人にとっての「居住形態(living arrangement)」として捉え直された。個人を分析単位とするということは、世帯をまとまりをもって機能する社会的単位として見ないことではない。むしろ逆に、世帯による個人のライフコースのコントロールや、世帯戦略と個人戦略の矛盾と一致などを具体的に観察することができた。

ユーラシアプロジェクトのもうひとつの強みは、長期間連続した資料が残る複数の地域のデータセットを用いた、マクロな比較分析と歴史分析であった。日本国内では3つの地域が重点地域として選ばれた。現在の福島県中部にあたる旧二本松藩領、濃尾地方の輪中地帯、長崎県西彼杵半島と天草である。それぞれ東北日本、中央日本、西南日本に位置し、対照的な人口学的かつ家族史的特徴を備えている。

婚姻年齢について提起した「フォッサマグナ」仮説を、速水はユーラシアプロジェクト遂行中に総合的な「人口一家族システム(demo-family system)」の地域性についての学説として提起し直した。1995年頃から「家族形態の2類型(東北日本と中央+西南日本)」を考えたが、その後、西南日本地域は東北日本型でも中央日本型でもない独自の地域との結論に達して、1999年以降は日本を東北、中央、西南に分ける3地域分類を用いるようになったという(速水2001)。3地域分類についての速水の見解の発展は、速水(2002)、速水(2001),速水(2009)により追うことができる。

各地域の特徴を示した速水(2009)の表 20-1

を表1として掲載する。ただしこの段階では分析結果が出揃っていなかったため、具体的な数値を入っていない。歴史的変化についても明言されなかった。これらの実証的追究はユーラシアプロジェクト終了後の継続研究における課題となった。

なお、3地域が異なる特徴をもつ理由として、速水は、東北日本の人口一家族システムは他地域に比べて生産年齢人口比率を一定の幅に保つ効果があることをシミュレーョンの手法により示し、厳しい気候条件への対応であった可能性を示唆した。また、東北日本は先住民の縄文人の文化、中央日本は渡来系の弥生人の文化、西南日本は東シナ海沿岸文化圏(東南アジア文化圏とつながる可能性もある)の文化を受け継いでいるという説明を試みている(速水 2001)。

表1 東北日本・中央日本・西南日本(東シナ海沿岸部)の家族・世帯構造の特徴

* * *********			10.00		
項目	東北日本	中央日本	西南日本		
主な家族形態	直系家族	直系また は核家族	直系,核, 合同家族		
相続パターン	単独相続	単独/不 平等相続	単独/平等 相続		
継承パターン	長男子/ 長子継承	長男子継 承	長男子/末 男子継承		
世帯規模	大	小	大		
初婚年齢	低	高	高		
第一子出産年齢	低	高	中		
出産数	少	多	多		
最終出産年齢	低	高	高		
婚外子	少	少*	多		
女子の社会的地位	低	高	高		
奉公経験	少*	多	少		
奉公開始の時期	結婚後	結婚前	結婚前		
都市化	低	高	低		
出生制限	高	低	低		
人口趨勢	減少	停滯	増大		

(出典) 速水 (2009) 567 ページ

*は次節の検討により疑問とされる箇所。なお、その他全てが実証的に確認されたわけではない。

ユーラシアプロジェクトのもう一つの大きな 柱が国際比較研究にあったのは、その成り立ちからして言うまでもない。家族史関係では、家と直 系家族(stem family)の国際比較をテーマとし て、1997年と2002年に2回の国際会議を開催 した。いずれも、ピレネー地方の直系家族を研究 するフランスのアントワネット・フォーヴ=シャ ムー(Antoinette Fauve-Chamoux)との連携が 軸となった。 ユーラシアプロジェクトは2000年3月をもって一応終結したが、収集した資料と構築したデータベースを用いた研究はその後も継続した。研究関心や地理的事情によっていくつかの研究グループが誕生し、京都の国際日本文化研究センターでは2000年度より3年間、「徳川日本の家族と社会」をテーマに掲げて共同研究会を実施した。さらなる歴史人口学的分析を積み重ねると同時に、歴史人口学の成果をより広い視野に立った家族史および社会史研究のなかに位置づけていくことを目指した。科研費も続けて取得した。

1.3 ユーラシアプロジェクト以後の成果

ユーラシアプロジェクトの家族史班の班長を 務めた責任を果たすため,筆者はまず3冊の論文 集を編集した。個人を単位とした家族史研究とい う方法的新しさを打ち出した『徳川日本のライフ コース』(落合編, 2006), 国内の地域的多様性を 扱った『徳川日本の家族と地域性』(落合編, 2015), 国際比較に基づく『歴史人口学と比較家 族史』(落合・小島・八木編, 2009) である。さ らに、1997年の国際会議の成果である The Stem Family in Eurasian Perspective: Revisiting House Societies, 17th-20th Centuries (Fauve-Chamoux and Ochiai eds., 2009)と, 2002年の 国際会議のプロシーディングス The Logic of Female Succession (Ochiai ed., 2002)も刊行し た。また『徳川日本のライフコース』と『徳川日 本の家族と地域性』の編集の過程で,「地域的多 様性の縮小」という全国的な現象が明らかになっ たことから,これに焦点を当てて再編集し英訳し t Japanizing Japanese Families: Regional Diversity and the Emergence of a National Family Model through the Eyes of Historical Demography, (Ochiai Emiko and Hirai Shoko eds.) を 2022 年中に刊行予定である。

本稿ではこれらの書籍として発表した家族史関係の成果の概要を紹介する。紙幅が限られているため、『徳川日本のライフコース』、『徳川日本の家族と地域性』、 Japanizing Japanese Families の概要をまとめて「徳川日本の人ロー家族システムの地域的多様性とその縮小」として論じたい。家と直系家族の国際比較シンポジウムの成果は第10章において触れられる予定である。

なお、ユーラシアプロジェクトの関係者により、家族史研究としての意義が大きい単著も相次いで刊行された。木下太志『近代化以前の日本の人口と家族』(2002)、岡田あおい『近世村落社会の家と世帯継承—家族類型の変動と回帰』(2006)、森本一彦『先祖祭祀と家の確立—「半檀家」から一家一寺へ』(2006)、平井晶子『日本の家族とライフコース』(2008)、中島満大『近世西南海村の家族と地域性—歴史人口学から近代の始まりを

問う』(2016) などである。これらについては各々の章との重複を避けるため、本章では限られた言及に留めたい。

2.徳川日本の「人口―家族システム」の地域的多様性

2.1 3地域説の実証的検討

2.1.1 人口・家族パターンの比較

地域性の多様な側面を捉えるため、表1として 再掲した速水の3地域説の表と,世界的に頻繁に 引用されるラスレットの「伝統的ヨーロッパにお ける家内集団構成の傾向」の表(Laslett 1983, ラスレット 1992) を参考にしながら、世帯、継 承,婚姻,出生,死亡,労働,人口についてそれ ぞれいくつかの指標を選び、3地域についての既 存研究から得られるかぎりの情報を集めた(表 2)。ラスレットも速水も、狭義の家族について の指標に留まらず, 労働などに関する指標も含め ているのは、家族が社会の中に埋め込まれている という,現代の社会科学において忘れられがちだ が当然の現実を捉えるために有効な方法である。 この考え方はジョン・ハイナル(John Hajnal) の「世帯形成システム(household formation system)」(Hajnal 1983)という概念にも通じる。

2.1.2 世帯構造

世帯構造については, 核家族世帯 (ハメルーラ スレット世帯構造分類3)の多い中央日本,直系 家族世帯(同 5 s)の多い東北日本,1 割近い合 同家族世帯(同5j)がある西南日本など,速水の 説の妥当性が裏付けられた。西南日本の数値は野 母村のデータによっているが、後述のようにこの 村では幕末に大規模世帯の分割が一斉に起きて おり、かつこの表に示したのは 1871 年について の数値なので、分割以前はさらに合同家族世帯の 割合が高かった。3地域の世帯規模の違いもおお むね予想どおりである。西南日本の世帯規模は幕 末の世帯分割以後に5.7に縮小したが、それ以前 はさらに大きかった。東北日本では旧二本松藩領 の2村が位置する太平洋側では,山家村が位置す る日本海側よりも世帯規模が小さく,後述のよう に 19 世紀に世帯規模が拡大する以前は中央日本 と大差なかったのに注意されたい。

2.1.3 継承

継承については、表1には含まれないが、まず 死亡譲渡と生前譲渡と新世帯創出の割合を比較 した。中央日本についての分析は「分家の創出と 絶家の場合を除いて」戸主の交替例の分析をした ものなので(速水 1992: 291)、その点をお断り しておく。いずれも隠居等の生前譲渡がかなりの 割合を占める。ただし東北日本は一般的には無隠 居地帯と言われ、旧二本松藩領は例外的な地域で

表 2 東北日本、中央日本、西南日本の人口・家族パターン

	地域	<u> </u>	東		小灰	中央		西南	
	村名	下守屋村 仁井田村 1716-1870		山家村 1760-1870		西条村 1773-1868		野母村 1766-1871	
	期間								
世帯	世帯構造 ハメルーラスレット1	12%	*1	5%	*4	11%	*3	2%	*8
	世帯構造 ハメルーラスレット2	3%	*1	1%	*4	0%	*3	4%	*8
	世帯構造 ハメルーラスレット3	32%	*1	35%	*4	41%	*3	36%	*8
	世帯構造 ハメルーラスレット4	18%	*1	20%	*4	36%	*3	27%	*8
	世帯構造 ハメルーラスレット5	35%	*1	39%	*4	11%	*3	31%	*8
	世帯構造 ハメルーラスレット5s	33%	*1			10%	*3	22%	*8
	世帯構造 ハメルーラスレット5j	2%	*1			1%	*3	9%	*8
	世帯規模	3.3~6.2	*8	4.8~6.0	*4	3.4~4.8	*8	$5.7 \sim 7.2$	*8
継承	死亡譲渡	32.2%	*5			62.4%	*7	54.4%	*9
	生前譲渡(隠居等)	43.5%	*5			26.8%	*7	29.4%	*9
	新世帯創出	24.3%	*5					16.1%	*9
	長男子継承割合	55.9%	*1			35.2%	*7		
	女性戸主割合	11.0%	*5			35.5%	*7	20.8%	*9
	家の連続性(90年以上連続する家)	26%	*8			33%	*8	32%	*8
婚姻	初婚年齢(男)	20.8	*2	22.9	*4	28.8	*2	31.1	*9
	初婚年齢(女)	16.7	*2	19	*4	22.5	*2	25.3	*9
	初婚夫婦の年齢差	4.7	*2			8.0	*2	6.4	*2
	離婚割合(初婚)	33.6%	*2			9.7%	*2	11.3%	*2
	再婚割合(離死別女性,50歳まで)	69.6%	*2			25.0%	*2	55.4%	*2
	生涯独身率(男)	2.2%	*11	7.7%	*4	10%	*12	12.1%	*9
	生涯独身率(女)	0.1%	*11	3.8%	*4	13%	*12	20.6%	*9
	村内婚率	32%	*6			21%	*8	92%	*8
出生	初産年齢							24.5	*9
	合計出生率(TFR)	2.99	*10	5.09	*4			3.56	*9
	合計有配偶出生率(TMFR)	2.77	*10	6.05	*4	5.9	*13	7.0	*9
	出生性比	115.3	*1			109.1	*7	104.0	*9
	婚外出生割合							11.7%	*9
死亡	平均寿命(男)	37.7	*6	36.8	*4	36.8	*7	33.4	*9
	平均寿命(女)	36.4	*6	37.5	*4	36.7	*7	36.0	*9
労働	奉公人割合(男)	5.4%	*3			3.1%	*3	非該当	
	奉公人割合(女)	5.1%	*3			1.7%	*3	非該当	
	奉公経験率(男)	34.5%	*6			50.3%	*7	非該当	
	奉公経験率(女)		*6			62.0%	*7	非該当	
	既婚奉公人割合(男)	62.5%	*3			6.5%	*3	非該当	
	既婚奉公人割合(女)	74.1%	*3			1.6%	*3	非該当	
人口	粗出生率	22.3‰	*13	37.1‰	*4	31.9‰	*13	27.7‰	*9
	粗死亡率	23.9‰	*13	26.4‰	*4	23.2‰	*13	22.6‰	*9
	自然増加率	-1.6‰	*13	10.7‰	*4	8.6‰	*13	5.1‰	*9

⁽注) 1) 下守屋・仁井田の両方もしくは一方。2) 世帯構造:西条は 1800年,野母は 1871年。 (出典)*1平井(2008)仁井田,*2 黒須・津谷・浜野(2012),*3 Ochiai(2009),*4 木下(2002), *5 Okada and Kurosu(1998), *6 成松(1992)仁井田, *7 速水(1992), *8 落合(2004a), *9 中島(2016)および中島による追加計算, *10 津谷(2001), *11 Tsuya and Kurosu(1999), *12 浜野・黒須(2009), *13 Nagata, Kurosu and Hayami(1998)

あることに注意しないとならない。長男子継承の 割合は東北日本で高く、中央日本ではそれほどで はない。継承年齢まで生存する男子数の影響も受 けるので、この違いがそのまま規範の強さを示す とはいえないが。西南日本の野母村については、 死亡譲渡と生前譲渡による男子継承のうち、長男 子の割合が 53.9%を占めていたことが分かって いる(中島 2016:表 6-8)。

中央日本における女性戸主割合の高さは注目に値する。速水 (1992) の第 11-1 表に戻ると、女性による継承の大半は妻によるものである。家長の死亡時点で妻と息子がいる場合、息子の年齢が低くても息子を次の家長とするか、あるは妻(母)が家長となるかは、その社会における女性の地位を示すとされる。女性戸主割合は西南日本がこれに続く。

なお、表2には載せていないが、死亡譲渡と生 前譲渡では継承者が明らかに異なる。女性戸主割 合の高い中央日本の西条村でも, 生前譲渡では女 性戸主による継承は 1 例も無く, 死亡譲渡では 50%が女性への継承であるのと著しい対照をな す。望ましい継承を確実にするための生前譲渡で は常に男性戸主が立てられたということである (速水 1992:291)。東北日本に位置する陸奥国 会津郡4村の資料を用いた岡田あおいの研究で も、生前譲渡では女性戸主への継承は 1.8%にす ぎず,死亡譲渡の場合の22.7%との違いは明らか である(岡田 2006:192)。西南日本の野母村で は死亡譲渡では 33.8%, 生前譲渡では 10.2%が 女性戸主への継承である(中島 2016:表 6-2)。 生前譲渡でも 1 割は女性を選択していることが 他地域との違いとして目を引く。

2.1.4 婚姻

婚姻については、婚姻年齢の地域差は予想どおりであり、東北は低く、中央と西南は高いという、「フォッサマグナ」仮説どおりの「西高東低」のパターンが明確である。他方、離婚率は速水の表1に含まれていないが、婚姻年齢と反対に「東高西低」であった。頻繁な離婚と再婚は東北日本の婚姻システムに組み込まれていた。再婚は西南日本と中央日本でも決して低くはなく、女性の再婚が忌避された中国、朝鮮など東アジア圏の婚姻慣習(平井・落合・森本 2022)と比べて際立つ日本の特徴と言える。

「伝統日本は皆婚社会」という定説を覆す高さの生涯独身率が見いだされたことは、特筆しておきたい。皆婚社会のイメージに近いのは東北日本のみで、中央日本も西南日本もそうは言えない。とりわけ西南日本の女性の 20%が生涯独身という割合の高さが目を引く。この数値は西彼杵半島の先端に位置する野母村についての中島満大の研究に拠ったものである。同じく西南日本の屋久

島の 1726 年という早い時期の「御検地名寄帳」を分析した溝口常俊は、男女とも有配偶率が低く、かつ妻がいない「夫+子ども」の組み合わせが多数発見されたことから、資料上では独身に見える男女が生家に住んだまま事実上の婚姻関係にあった「夫問い(ツマドイ)婚」とも呼ぶべき慣習が存在したと推定している(溝口 2015)。中島満大による野母村の研究は 18 世紀後半以降の資料を用いた分析なので、溝口の屋久島の事例とは半世紀ほどの時間的隔たりがある。未婚のまま子どもをもつ男女はそれほど多くないが、1760~70 年代には第 1 子出産と同年に結婚を登録するケースが 4 分の 3 を占める。結婚前の男女が性交渉をもつヨバイや足入れ婚と呼ばれる慣習があった証拠である(中島 2015)。

2.1.5 出生

出生については、表1では「西高東低」であると想定されているが、東北日本でも太平洋側の旧二本松藩領の2村は低いが日本海側の山家村は高いという違いがある。また合計出生率と合計有配偶出生率を比較すると、西南日本では差が大きい。高い生涯独身率のせいだろう。ただし西南日本では婚外出生割合も11.7%にのぼる。婚姻と出生については第12章で詳論される。なお、中央日本における婚外出生割合も別の指標により得られており、西南日本と同等以上とされるので、表1は修正されるべきであると考えられる。出生性比は「東高西低」であり、表1の予想と合致する。

なお、ヨーロッパの婚姻が年月日を特定できる「イベント」であるのに対し、日本の婚姻は性的関係の開始、同棲の開始、関係の安定、社会的承認、公的機関への届け出の間にずれがあり、ある程度の時間をかけて進行する「プロセス」であると捉えられる(落合 2004b)。宗門帳への記載のタイミングが東北日本では早いのに対して西南日本では遅く、東北日本では婚姻関係が安定するまでに離婚が多発し、西南日本では記載前に出生が起きることもあるということか。

2.1.6 労働

労働については、奉公人割合は村の総人口に占める奉公人の割合、奉公経験率は生涯に奉公経験のある人の割合を示す。前者は東北日本の方が高く、表1の速水説に疑問を抱かせるが、奉公経験率はたしかに中央日本の方が高い。中央日本の奉公経験者は村外に移動してしまうからである。とはいえ、4割近い人が奉公を経験する東北日本の奉公経験を「少」とするのはやはり過小評価と言わざるをえない。奉公人の未既婚の別は東北日本と中央日本で大きな違いを示す(Ochiai 2009)。中央日本では結婚前の一時期に奉公を経験する(ヨーロッパにおける)「ライフサイクル奉公人」

のパターンが主であるのに対して、東北日本では結婚後に奉公に出てほとんどが村に戻る帰還型移動 (circulation) のパターンをとっている (木下 2002、永田 2006)。なお、西南日本のデータベース作成に用いた野母村の資料には奉公の記載がないのでここでは「非該当」とした。

2.2 日本の世帯形成システム

以上の比較の成果を踏まえ、東北日本、中央日本、西南日本の「世帯形成システム」を次のようにまとめておこう。ハイナルにならい(Hajnal 1983)、(1) 婚姻(と出生)、(2) 世帯形成、(3) 労働(等) による人の移動に注目したものである。

東北日本型世帯形成システム

- (1) 男女ともに早婚だが、離別も再婚も多い。 出生間隔が広く出生率は低い(経済停滞期),あ るいは高い(経済成長期)。
- (2)一人の既婚子が親の世帯に留まって直系家族世帯をつくる。長男子継承の傾向が強い。
- (3) 既婚の男女が奉公人となり、移動したのち家に戻る帰還型移動を行う。跡取りでない男子は他の世帯の養子となり跡取りとなる(経済停滞期)、あるいは分家する(経済成長期)。

中央日本型世帯形成システム

- (1) 男性は晩婚,女性はやや晩婚だが,離別も 再婚も比較的少ない。生涯独身率も低くはない。 出生間隔が短く出生率は高い。
- (2)一人の既婚子が親の世帯に留まって直系家族世帯をつくるが、単純家族世帯の割合が高い。
- (3) 跡取りでない未婚の男女がライフサイクル 奉公人となり、離家する。

西南日本型世帯形成システム

- (1) 男女ともに晩婚であり生涯独身率が高い。 結婚前の性交渉,妊娠が多い。離別は比較的少な く,再婚は多い。
- (2)しばしば複数の既婚子が親の世帯にとどまり、あるいは親族が合同家族世帯をつくる。
- (3)子どもが世帯間を移動する。婚外子は特に 移動性が高い。

非常に雑駁な比較ではあるが、ヨーロッパの歴史人口学的家族史研究の成果を総合したラスレットの「伝統的ヨーロッパにおける家内集団構成の傾向」の表(落合 2015 に転載)と照らし合わせてみると、日本の中央日本型はヨーロッパの地域類型の西欧型に似た面があり、東北日本型は中欧型、地中海型、東欧型を混合したもののような印象を受ける。これに対して、西南日本型はヨーロッパのいずれの地域とも共通性を見つけにくいように思う。

2.3 3地域説を超える可能性

以上,3地域説について,これまでの研究結果に基づいて再検討してきた。表1にあげられた各地域の特徴の多くは検証されたが,一部は修正が必要であることが分かった。中央日本における婚外子出生は「多」とすべきであり,東北日本の奉公経験もまた「多」とすべきだろう。なお,その他の項目もすべて実証的に確認されたわけではない。空白セルを埋める努力が今後も必要である。

主に 3 つの重点地域のデータを用いた検証であるので、それらにより東北日本、中央日本、西南日本を代表させるのは無理があるという批判も当然あろう。重点地域以外の山家村を加えた東北日本については、たしかにこの問題が明らかになった。木下太志による山家村の研究結果は、世帯規模についても出生率についても旧二本松藩領と大きな違いを示している(木下 2002)。他方、初婚年齢が低く、結婚後の奉公が多いといった社会構造に関する側面では、山家村は東北日本型に当てはまる。

では、3地域説の一画を形作る「東北日本」は 太平洋側と日本海側に二分されるべきなのだろ うか。この点については、山家村と旧二本松藩領 との違いは気候や経済状況などの外在的な条件 により生み出されているのではないかと考えて いる。冷害は親潮の流れる太平洋側の方が深刻だ ったと言われる。たしかに山家村では天明・天保 飢饉も他の頻繁な死亡クライシスと異ならない (木下 2002:130)。また山家村を含む村山地方は 中世末期から紅花を特産としており, 寛政期には 中層・下層農民にまでその経済的恩恵は広まって いた(木下 2002:25)。日本海側の方が経済的条件 が良かったのである。時期的にはおくれたが、19 世紀になって太平洋側でも経済条件が改善した。 平井晶子は山家村の近くの中山口村と旧二本松 藩領の仁井田村を比較して,人口変動の経路は異 なるものの、19世紀中葉に人口増加期を迎える のは共通しており,幕末へ向けての平均世帯規模 の拡大と中規模世帯への均質化, 絶家率の低下, 家の継続性の高まりが両方で見られることを指 摘している (平井 2011)。

東北日本を二つに分ける必要はおそらく無く, 条件の違いによる差が見られるだけであり,幕末 に向けて共通の社会変容を経験したと,とりあえ ずまとめておこう。

ただし「中央日本」や「西南日本」,特に広域に及ぶ「中央日本」について他の地域のデータセットを用いて分析した場合,3地域説が4地域説や5地域説に発展する可能性はある。

3. 地域的多様性の縮小と標準的家族モデルの誕生:日本化する日本家族

3.1 明治維新に先立つ日本社会の統一

前節では、ユーラシアプロジェクト以後、徳川日本の人口一家族システムの地域的多様性が、より詳細に実証的に解明されてきたことを見てきた。しかしこの間の歴史人口学的家族史研究の成果はそれに留まらない。各地域の研究が深まり、時系列的変化も含めた地域間比較が可能になるにつれ、明治維新に先立って、18世紀末ないしは19世紀前半から地域的多様性が縮小し、標準化へと向かう変化が始まっていたことが浮かび上がってきた。この発見は、日本の家族史研究の中でも独自の視角を打ち出したものといえよう。

この発見に焦点を当てたのが、近刊予定の Japanizing Japanese Families である。「日本 化する日本家族」というタイトルにこめた意味は、研究者にとっても一般の人々にとっても典型的 な日本の伝統家族と思われているような特徴を備えた家族が、この頃になって庶民層にも成立したということである。地域的多様性という観点から見れば、前節で見たような特性をもっていた各地域の家族が、標準的な家族モデルに向かって変化していった。

従来の日本家族研究では、庶民レベルでの典型的「家」の成立は、17世紀の「単婚小家族化」によるとするか、明治国家の政策とりわけ民法制定によるとするのが有力な見解だった。しかしユーラシアプロジェクト以後の歴史人口学的研究は、17世紀以降も地域的多様性は色濃く残り、「単紀以降も地域的多様性は色濃く残り、「単紀単位の時間差をもって進行したこと、しからとしておく)に及ぶ標準化の動きが、民法制定どころか明治維新以前に始まっていたことをしておく)に及ぶ標準化の動きが、民法制定としておく)に及ぶ標準化の動きが、民法制定としておく)に及ぶ標準化の動きが、民法制定としておく)に及ぶ標準化の動きが、民法制定としておく)に及ぶ標準化の動きが、民法制定としておく)に及ぶ標準化の動きが、民法制定としておく)に及いで、世本を統一したのではなく、むしろ社会レベルでの日本の統一が明治維新を可能にし、中央集権的近代国家成立の地ならしたという、歴史観の転換である。

3.2 東北日本の変容:家の確立と新たなライフコースの標準化

まず東北日本については、19 世紀に入ってから幕末に向けて、特に天保の飢饉の後、かなり根本的な社会変容が起きたことが様々な角度から見えてきた。ユーラシアプロジェクトで東北日本の代表として分析されてきた旧二本松藩領では、18 世紀後半から人口減少が見られるが、天保飢饉の前後を境に一転して人口増加が始まった。同時期には世帯規模の拡大も起きた。

19 世紀の東北で何が起きたのかという問いに、

旧二本松藩領の仁井田村のデータを分析した平 井晶子は、「家の確立」と「ライフコースの均質 化」というマクロとミクロの両面から答えた(平 井 2008)。「家」は永続性、単独相続、家産の維 持, 直系家族的世帯構造などに特徴づけられると されるが、これらの特質をもつ「家らしい家」は 東北日本では19世紀初頭に確立したという(平 井 2008:115)。他方、個人の人生から見ると、出 生順や性別などによって, ライフコースが標準化 されるようになった。跡取りでない息子は分家を するのではなく,他家に養子に行くのが一般的に なった。また 18 世紀には「ライフコースのさま ざまな段階で離婚・再婚が繰り返されていた」の に 19 世紀には離婚は結婚後五年以内に集中する ようになった。これは相続人とその配偶者を早く 確定して、家を安定させるための戦略であったと 平井は考える(平井 2006:103)。

東北日本における家の確立は、永田メアリーによる名前の研究からも確認された。永田によれば、旧二本松藩領の仁井田村と下守屋村では、18世紀末までに「通字」など個々の家に固有の名前のパターンが登場する。家意識の成立と言ってよかろう。同様の変化は中央日本の西条村でも見られるが、その程度は東北日本には及ばない(永田2006)。

東北日本に隣接する北関東の「姉家督」という相続慣習を研究した山本準もまた、「姉家督」は1850年以降に増加することから、「人口減少、世帯の崩壊・消滅に危機感を募らせた農民たちが、家をより確実に継承していく戦略として初生女子に婿を迎えるという方法(姉家督)を採用し始めたのかもしれない」としている(山本2006:281)。「姉家督」は典型的な「家」の長男子相続とは異なるが、より厳しい自然環境のもとでの合理的な継承戦略であったと山本は考える(山本2006)。強い家を創り出すということでは、旧二本松藩領と同じ変化である。

同時期には奉公のパターンも変化している。前節で見たように、東北日本では結婚後に奉公に出てほとんどは村に戻る帰還型移動(circulation)が一般的だった。しかし 19世紀には結婚前に奉公に出るパターンに変化する。とりわけ女性の変化は顕著であり、18世紀にはほぼ存在しなかった未婚の女性奉公人が 60~70%を占めるようになる。結婚前に奉公に出る中央日本のようなパターンに変化した。これに対応し、女性の初婚年齢も上昇した(Ochiai, 2022b forthcoming)。結婚後の奉公の減少は、広かった出生間隔を狭め、出生率の上昇にもつながったと考えられる。結婚前の奉公、早婚、低出生率という東北日本の特性が薄められた。

奉公のパターンの変化の背景には,養蚕と織物 業の発達による女性労働需要の急上昇があった と見られる。二本松藩は換金作物やプロト工業を 抑制する政策をとっていたが、1780年頃には政 策を変更し,成長を促進する方向に転じた(庄司 他 1982:79-81)。女性労働の価値が高まったため、 親たちは娘を早く嫁がせるよりも長く家に留め, あるいは奉公に出させることにより、家庭経済に 貢献させようとしたと考えられる(Ochiai 2022b forthcoming)。すなわち東北の変容を惹き起こし たのは, 飢饉や危機への対策ばかりではない。 商 工業の発達と市場経済の進展, それによる労働形 態の変化というポジティブな要因がむしろ重要 だった。川口洋もまた、奥会津における越後国か らの移住者引き入れは, 天明飢饉による困窮とい う表向きの理由とは違い,「大麻、麻織物などの 生産活動の活性化」が女性労働力の需要を急激に 上昇させたからだろうと論じている (川口 2015)。

前項で触れた東北日本の太平洋側と日本海側の違いも、この文脈に置き直してみることができる。19世紀における太平洋側の変容の動因となった商工業の発達と市場経済の進展が、紅花栽培を手掛けていた村山地方では早く起きていたということではないだろうか。

3.3 西南日本の変容:婚姻と世帯

西南日本については、ユーラシアプロジェクトの段階までは他地域と比較した特異性が強調されてきたが、その後の研究により、この地域の家族も近世後期に変容していたことが明らかになった。18世紀半ばの野母村における婚前妊娠割合の高さを発見した中島は、さらに時系列的変化を分析して、18世紀半ばから19世紀半ばまでの1世紀間に、婚前妊娠割合が7割以上から4割以下に減少したことを発見した。すなわち幕末には、結婚してから子供をもうけるという「標準的な結婚」が浸透しかけていた。結婚届出のタイミングが次第に早まったことで、初婚年齢は男性5歳、女性2歳低下した(中島2015)。

また規模の大きさと水平方向への拡大が特徴 的だった野母村の世帯も、幕末近くに分裂し、比 較的小規模でより単純な構造の世帯が増えた。分 裂後は合同家族世帯よりも直系家族世帯が多数 派となっている。世帯の分裂は宗門帳の記載方針 の変更によるものであろう。

それが支配方式の変化を反映したものだったとうかがわせる研究もある。隠れキリシタンのライフコースを再現した村山聡は、「隠れ」は家族の宗教ではなく個人の信仰であり、双系的な親族関係の中で、とりわけ女性親族の影響により獲得されるものだったが、「1805年の種々の取り調べ

は、結果として、単婚小家族の家の代表者である 家頭が, いろいろな社会問題を管理しなければい けないことを明確にした」という。「公儀の管理 の論理が末端の家族関係にまで影響をおよぼす ことになったことは明らかである。」(村山 2015) 近世末における西南日本の変容は、「単婚小家 族」の自立と「婚姻革命」という17世紀に起き たとされる社会変動を思い起こさせる。この時に 起きたことは、家族研究の用語を用いれば、「屋 敷地共住集団」内の傍系親族や隷属民が自立し, 直系的継承を軸とする家が確立したということ と言い換えられよう(落合 1999)。西南日本の 家族の独特の地域性は、文化的違いというより、 先進地域では17世紀に消失した婚姻慣習や共住 集団の構造が後の時代まで残り続けたというこ とであろうか。「屋敷地共住集団」はタイなど東 南アジア地域でも見られる(水野 1981)。双系 的な親族構造に着目するなら, 日本社会は東南ア ジアと共通する基層構造をもつ(落合 2022)。 西南日本の経験は、国境を越えた広がりの中に日 本を位置付けるための手掛かりとなるだろうか。 西南日本は東シナ海沿岸文化圏に属し, 東南アジ ア文化圏とつながる可能性もあるという速水の 示唆を思い出す。

3.4 ひとつになる日本とその要因

東北日本と西南日本ばかりではない。中央日本の濃尾地方でも同様の変化が見られる。構造の単純な小家族を特徴としていたこの地域で,幕末に向かって直系家族世帯が増加する。わずかではあるが世帯規模の拡大も見られる。3地域のいずれにおいても,程度の差はあるとしても,また複雑性の上昇(中央日本)の結果なのか単純化(西南日本)の結果なのかという方向は異なっていても,直系家族世帯が標準的な世帯構造となるという同じ趨勢が見られるのは重要である。また,濃尾でも,東北日本ほどでないにしても,次第に名前の連続性が上昇している。家意識もまた強まったことがうかがえる。

ここまで農民について見てきたような家の確立とそれに伴うライフコースの変化は、武士についても見られる。徳山藩藩士の子どもたちのライフコースを分析した坪内良博は、17世紀には長男相続の制度は緩やかに運用されており、家督を継がない長男や二男以下には別家という道もあったが、18世紀に入るとその道は閉ざされて他家へ養子に入るのが一般的となり、18世紀後半には出家者も増加することを見出した(坪内2006)。

筆者はかつて,幕末に始まる人口増加の第四の 波と共に,「徳川体制からの人口学的離陸」が起 きたと論じた。出産へのまなざしが変化し、堕胎・間引きを良しとしない心性が広がっていったことを示した(落合 1994)。近代の始期が明治維新から前倒しされたということだが、ユーラシアプロジェクト以後の歴史人口学的家族史研究は、出産をめぐる心性のみではなく、それを包み込む家族などの社会関係の変化と、それに関係した個人のライフコースの変化と標準化という、全般的な社会変動が明治維新に先立って起きていたことを明らかにした。それは地域性という観点から見ると、日本の均質化ということだった。

そのような全国的な社会変動は何により引き起こされたのかという問いが当然立てられる。市場経済の発達,人口移動,都市文化の地方への伝播,それにいささかトートロジカルではあるが、宗門改帳そのものが日本を均質化させる作用をしたという面もあるだろう。全国から集めた138冊の宗門人別改帳の記載形式を検討した平井晶子は、「18世紀末を境として、二者関係の集合体としての家族から筆頭者中心の家族へ、・・『記載された家族』が変化した」ことを発見した。「家」的な記載への変化である(平井2015)。西南日本について村山(2015)が示したように、単婚小家族の家長に管理責任をもたせるという、国家による支配方式の明確化と関係しているのではないだろうか。

森本一彦もまた宗門人別改帳の旦那寺記載を 分析して,嫁や養子が旦那寺を持ち込むなどの 「半檀家」という慣習が 18 世紀の初めにはかな りの地域に分布していたが,19 世紀中頃までの 間に次第に減少して一家一寺制が確立したこと を明らかにした。双系的な先祖観から家の先祖と いう観念への転換を制度的に推進したのが一会 一寺制だといえる。家を単位とする先祖祭祀の強 化と言えば,儒教イデオロギーの影響を想像する が,幕府の法令では宗門帳編纂事務の簡便化と見 けられなかったと森本は言う。資料に書かれてい るとおり,これもやはり国家による支配方式の問 題だったのではないだろうか。

おわりに

ユーラシアプロジェクト以後の歴史人口学的 家族史研究は、近代の始期を前倒しするという、 歴史観の転換をもたらした。近世の盛期にはヨー ロッパ域内の多様性に匹敵するか凌駕するとも 見える地域的多様性を列島内に抱えていたのに、 近世後期には多様性が縮減し、各地域の家族はそれぞれ異なる方向から全国的に共通した標準家 族モデルに近づいていった。成立したのは、日本 の伝統家族として思い描かれるような理念型に 近い家族だった。「日本家族が日本化した」と表 現したのはこのことである。

ここでひとつの問いを立てておきたい。このよ うにして明治維新前に成立したのは,「家」だっ たのだろうか、「近代家族」だったのだろうか。 「近代家族とは近代国民国家の基礎単位とみな された家族のことである」と西川祐子はシンプル かつ本質を突いた近代家族の定義を行なった(西 川 1994)。 筆者もそのような定義はありえると考 えている (落合 2019)。 近世末に成立したのは「家」 の理念型のような標準家族モデルだったが, それ が全国的な標準となったことで,近代国家の基礎 単位となることができた。その標準化したモデル とは、奉公のパターンや初婚年齢、出生率、離婚 率などに注目すると、中央日本型に近い。中央日 本型が西欧型の世帯形成システムに近い特徴を もつことを思い出すと,近代国家の基礎単位であ る「近代家族」となるための条件を備えたモデル に収斂したと言えるかもしれない。その後の近代 日本社会において、日本の家族は、情緒的絆や子 供中心主義, 公私の分離などヨーロッパの「近代 家族」に近い性質を獲得する一方, 永続性, 直系 的世帯構造などの「家」的性質を手放していった。 完成した「家」が国家の単位という意味で「近代 家族」となり、次第に「近代家族」的性質を強め てゆく過程を,ドイツやフランスなどの直系家族 地帯と比較しながら検討すれば, 今後の「家と近 代家族」研究の展望が開けるように思われる。「家」 と「近代家族」は相容れない概念ではないのかも しれない。

これと関連して、国際比較によって世界の中に 日本の家族を位置づけるという課題もある。家と 直系家族の国際比較についてのシンポジウムの 成果は別の章で扱われるのでここでは詳論しな いが, The Logic of Female Succession で強調し たかったのは、直系家族制における女性による, あるいは女性を介した相続の重要性である。日本 の婿養子相続などがそれに当たる。ピレネーでは, 婿養子にすることはないが、娘の夫による相続は 死亡譲渡の 7.6%, 生前譲渡の 13.4%を占める(フ オーヴーシャムー 2009)。日本では「家」とい うと女性の地位の低さが特徴のように考えられ ているが、世界的に見れば「直系家族」は女性の 地位が比較的高い家族制度である。「直系家族」 はレヴィーストロースが maison と名づけた種類 の家族制度であり,父系や母系のような単系出自 にこだわらない双系的親族関係が優位する地域 に発達する傾向がある。出自ではなく土地や建物 のような財産の相続を軸に成立する集団である。 日本の「家」の性格と非常によく合致する。日本 の「家」はけっして特殊ではない。日本家族を世 界の文脈に位置づけるにはグローバルな重層的

図1ピレネー地方の家 1 家屋



2 家屋(拡大)



6 物置小屋

5 外壁に書かれた屋号 (maison XX)



3 家屋 (長い面)



家の奥の貯水槽 山からの水路の水を貯める





8 メルーガ家の跡地の貸別荘





様性の中に位置づける必要がある(落合・森本・ 平井 2022)。

最後に、フォーヴーシャムーの研究対象であるピレネー地方において筆者が2016年にフィールドワークを実施した折に撮影した家の写真(図1)を紹介して本稿を閉じたい。建物としての家はピレネーにおいても重視されており、しばしば屋号をもっていることも日本の家と共通する。屋号を家屋の外壁に大書している場合もある。ただしそれは観光化に対応した近年の習慣であるという。フレデリック・ル・プレーの研究で知られるメルーガ家の建物は既になく、跡地は何棟もの貸別荘になっていた。

引用文献

- 岡田あおい,2006,『近世村落社会の家と世帯継承-家族類型の変動と回帰』,知泉書館。
- 落合恵美子,1994,「近世末における間引きと出産」,脇田晴子・スーザン・ハンレー編,『ジェンダーの日本史』,上巻,東京大学出版会,425-459ページ。
- 落合恵美子,1999,「速水融『近世農村の歴史人口学的研究』」,筒井清忠編,『日本の歴史社会学』,岩波書店,249·26ページ。
- 落合恵美子,2004a,「歴史人口学から見た家・村・ライフコース――小農社会論としての家・村論再考」,日本村落研究学会編,『年報村落社会研究』,第39集,6月,農山漁村文化協会,49-96ページ。
- 落合恵美子,2004b,「歴史的に見た日本の婚姻 ——原型か異文化か」,『家族社会学研究』,第15 巻2号,2月,39-51ページ。
- 落合恵美子編,2006,『徳川日本のライフコース ——歴史人口学との対話』,ミネルヴァ書房。
- 落合恵美子,2009,「序論-歴史人口学と比較家族史」,落合・小島・八木編,『歴史人口学と比較家族史』,早稲田大学出版会,1-30ページ。
- 落合恵美子編,2015,『徳川日本の家族と地域性 ——歴史人口学との対話』,ミネルヴァ書房。
- 落合恵美子,2015,「序論 徳川日本の家族と地域性研究の新展開」,落合編,『徳川日本の家族と地域性』, ミネルヴァ書房,1-36ページ。
- 落合恵美子,2019,「親密圏と公共圏の構造転換 -ハーバーマスをこえて」,『思想』,4月号(1140 号),岩波書店,146-166ページ。
- 落合恵美子,2022,「アジアの重層的多様性―セクシュアリティとジェンダーから見る」,落合恵美子・森本一彦・平井晶子編,『リーディングスアジアの家族と親密圏3セクシュアリティとジェンダー』,有斐閣,1-29ページ。
- 落合恵美子・小島宏・八木透編, 2009, 『歴史人 口学と比較家族史』, 早稲田大学出版会。

- 落合恵美子・森本一彦・平井晶子編,『リーディン グスアジアの家族と親密圏』(全3巻),有斐閣。
- 川口洋, 2015, 「19世紀初頭の奥会津地方における移住者引き入れ」, 落合編, 『徳川日本の家族と地域性』, ミネルヴァ書房, 125-151ページ。
- 黒須里美・津谷典子・浜野潔,2012,「徳川期後 半における初婚パターンの地域差」,黒須編, 『歴史人口学から見た結婚・離婚・再婚』,麗澤 大学出版会,24-56ページ。
- 木下太志, 2002, 『近代化以前の日本の人口と家 族』, ミネルヴァ書房。
- 庄司吉之助他, 1982, 『二本松市史四 近世 I 』, 二本松市。
- 坪内良博,2006,「武士の子の将来―徳山藩士の場合」,落合編,『徳川日本のライフコース』,ミネルヴァ書房,371-391ページ。
- 津谷典子,2001,「近代日本の出生レジーム―奥州二本松藩農村の人別改帳データのイベントヒストリー分析,」速水・鬼頭・友部編,『歴史人口学のフロンティア』,東洋経済新報社,219-244ページ。
- 中島満大,2015,「西南海村の人口・結婚・婚外出生」,落合編,『徳川日本の家族と地域性』,ミネルヴァ書房,187-216ページ。
- 中島満大,2016,『近世西南海村の家族と地域性 -歴史人口学から近代の始まりを問う』,ミネ ルヴァ書房。
- 永田メアリー,2006,「直系家族システムにおける労働移動―濃尾と東北の比較,」落合編,『徳川日本のライフコース』,ミネルヴァ書房,141-182ページ。
- 永田メアリー,2006,「改名に見る家の戦略と個人の選択—濃尾と東北の比較」,落合編,『徳川日本のライフコース』,ミネルヴァ書房,305-338ページ。
- 成松佐恵子, 1992, 『江戸時代の東北農村—二本 松藩仁井田村』, 同文館出版。
- 西川祐子, 1994,「日本型近代家族と住まいの変 遷」,『立命館言語文化研究』, 6-1, 7月, 25-63 ページ。
- 浜野潔・黒須里美,2009,「徳川農村は『皆婚社 会』か?—生涯未婚率推計の試み」,『統計』, 60(6),6月,2-9ページ。
- 速水融,1992,『近世濃尾地方の人口・経済・社会』,創文社。
- 速水融,2001,「歴史人口学と家族史の交差」,速水・鬼頭・友部編,『歴史人口学のフロンティア』,東洋経済新報社,17-44ページ。
- 速水融,2002,「序章 歴史人口学と家族史,」速 水編,『近代移行期の家族と歴史』,ミネルヴァ 書房,1-17ページ。

- 速水融,2009,「人口・家族構造と経済発展-日本 近代化の基層」,『歴史人口学研究-新しい近世 日本像』,藤原書店,559-590ページ。
- 平井晶子, 2006,「結婚の均質化と『家』の確立」, 落合編,『徳川日本のライフコース』, ミネルヴァ書房, 89-109ページ。
- 平井晶子, 2008,『日本の家族とライフコース』, ミネルヴァ書房。
- 平井晶子,2011,「東北日本における家の歴史人口学的分析—18・19世紀の人口変動に着目して」,笠谷和比古編,『18世紀日本の文化状況と国際環境』,思文閣出版,215-232ページ。
- 平井晶子, 2015,「宗門人別改帳の記載形式」,落 合編,『徳川日本の家族と地域性』, ミネルヴァ 書房, 435-459 ページ。
- 平井晶子・落合恵美子・森本一彦, 2022, 『リーディングスアジアの家族と親密圏 2 結婚とケア』, 有斐閣。
- フォーヴーシャムー,アントワネット,2009,「家の継承-フランス中央ピレネー地方と東北日本の継承システム」,落合・小島・八木編,『歴史人口学と比較家族史』,早稲田大学出版会,33-62ページ。
- 水野浩一, 1981, 『タイ農村の社会組織』, 創文社。 溝口常俊, 2015, 「近世屋久島における世帯構成 と『夫問い(ツマドイ)婚』」, 落合編, 『徳川日 本の家族と地域性』, ミネルヴァ書房, 155-186 ページ。
- 村山聡, 2015,「海の支配と隠れキリシタン」,落 合編,『徳川日本の家族と地域性』,ミネルヴァ 書房,217-241ページ。
- 森本一彦, 2006, 『先祖祭祀と家の確立―「半檀家」から一家一寺へ』, ミネルヴァ書房。
- 山本準,2006,「人口学的側面から見た姉家督―常陸国茨城郡有賀村を事例として」,落合編,『徳川日本のライフコース』,ミネルヴァ書房,255-282ページ。
- ラスレット, ピーター, (酒田利夫・奥田伸子訳), 1992, 『ヨーロッパの伝統家族と世帯』, リブロポート。
- Fauve-Chamoux, Antoinette and Ochiai, Emiko ed., 2009, *The Stem Family in Eurasian Perspective: Revisiting House Societies, 17th-20th Centuries, Bern: Peter Lang.*
- Hajnal, John, 1983, "Two kinds of preindustrial household formation system," in Wall, Robin and Laslett eds., Family Forms in Historic Europe, Cambridge University Press, 65-104. (浜野潔訳, 2003, 「前工業化 期における2つの世帯形成システム,」速水編, 『歴史人口学と家族史』,藤原書店, 415-477

ページ)

- Laslett, Peter, 1972, Household and Family in Past Time, Cambridge University Press.
- Laslett, Peter, 1983, "Family and Household as Work Group and Kin Group,"in Wall et al. eds., *Family Forms in Historic Europe*, Cambridge University Press,513-563.
- Nataga, Mary Louise, Satomi Kurosu and Akira Hayami, 1998, "Shimomoriya and Niita of the Nihonmatsu Domain in the Northeastern Region of Tokugawa Japan," EAP Working Paper Series, No. 20.
- Ochiai, Emiko ed., 2002, *The Logic of Female Succession*, editorship, the Proceedings of the 19th International Research Symposium, International Research Center for Japanese Studies, held in Kyoto, January 10-13.
- Ochiai, Emiko, 2009, "Two types of Stem Household System in Japan: the *Ie* in Global Perspective," in Antoinette Fauve-Chamoux and Emiko Ochiai eds., *The Stem Family in Eurasian Perspective: Revisiting House Societies, 17th-20th Centuries,* Bern: Peter Lang, 287-326. (落合恵美子, 2015「日本における直系家族システムの2つの型」, 落合編, 『徳川日本の家族と地域性』, ミネルヴァ書房, 279-314ページ)
- Ochiai, Emiko, 2022a forthcoming, "Regional Diversity and the Emergence of a National Family Model at the Verge of Modernity," Ochiai and Hirai eds., *Japanizing Japanese Families*, Leiden: Brill.
- Ochiai, Emiko, 2022b forthcoming, "Marriage and Childbirth among Female Servants in a North-eastern Village: Reconciliation between Work and Reproduction in Japanese Labour History," Ochiai and Hirai eds., *Japanizing Japanese Families*, Leiden: Brill.
- Ochiai, Emiko and Hirai Shoko ed., 2022 forthcoming., Japanizing Japanese Families: Regional Diversity and the Emergence of a National Family Model through the Eyes of Historical Demography, Leiden: Brill.
- Okada, Aoi and Kurosu Satomi, 1998, "Succession and the Death of the Household Head in Early Modern Japan: A Case Study of a Northeastern Village," *Continuity and Change*, 13-1:143-166.
- Tsuya, Noriko and Satomi Kurosu, 1999, "Reproduction and Family Building Strategies in 18th and 19th Century Rural Japan: Evidence from Two Northeastern Villages," presented at the Annual Meeting of the Population Association of America, New York, March 25-27.